楼閣の町

源雪風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
楼閣の町

【Ｎコード】
Ｎ１３１１Ｋ

【作者名】
源雪凪

【あらすじ】
楼閣だらけの街で、アルバイト男子たちが、なんちゃってしつじになって、観光客に振り回される。

あるところに、楼閣が立ち並んでいる国がありました。
見渡す限り楼閣しか見えない。
この国には、背の低い建物は、ない。
なぜかというと、街外れにある火山のせいで、地面が熱く、低い建物では、クーラーも効かないくらい熱くなり、体温が上がったり、商売あがったり、血圧があがったりするからでした。
その上、雨季には、大雨洪水あられがやんややんやと降り注ぎ、東京タワーの半分くらいまで水かさが来る。
だから、もうやけになって、すごく高い建物を作るようになった。
しかも、この建物は変わった仕組みがあって、いざというときは、建物のてっぺんに集めてある重要な部屋がちょん切れて、エンジンとプロペラで飛んで逃げることができる。

どうしてそこまでして厄介な土地に住むのかと住人に尋ねたところ、
「どんなにへそ曲がりな土地でも、ここは俺たちのふるさとだ。」
と、啖呵を切る始末だ。

楼閣同士は、朱色の橋で繋がっていて、自由に行き来できる。
けちな奴は橋の通行税を取って、大儲けしている。
楼閣の外観は、京都と中国を足したような、エキゾチックな造りなので、観光客もわんさかどっさりやってくる。
そんな楼閣の街で、近頃、観光客目当ての萌え~な店が増えてきた。
この街の人は火山のせいか、ラテンのノリの情熱的な人が多いので、大いに流行した。
そのうちの一つ、執事カフェを覗いてみよう。

「てか暇だな。おい。」
横になって、ジャンプを読みながら嘆く男子が一人。
名前を奇妙丸といって、色白の肌に紅い着物をまとっている。
執事よりも、お小姓さんが向いていそうな日本的な雰囲気がする。
「しばらくしたら、観光客が山盛り来るから、忙しくなるさよ。」
お城のプラモデルを組み立てながら、あくびをする少年。
彼はカニ玉くんと呼ばれている。
名前の由来は、髪の毛の色がカニ玉みたいなおいしそうな黄色だからだ。
「むう。なにか面白いテレビはやっとらんのかね。」
リモコンのボタンをむやみやたらと連打する少年。
興福寺の阿修羅像似の彼は、孔明という。
名字が孔で、名前が明である。
「ぶっちゃけ俺たち、執事っぽさないよな。」と、そっけない奇妙丸。
「とりあえず、スーツを着て、それっぽく振る舞えばええんですよ。」と、テレビに夢中の孔明。
「僕たち、アルバイトだしね。しかも、今日が初日だもんね。」と、完成した城を頭に載せて、バランスをとるカニ玉。
「とにかく、全身から執事ですよオーラを出せば、ええんでない？」と、奇妙丸。
「さいですねー。ははっ、テレビつまんない。」
しみじみとテレビを消す孔明。
「ま、めえめえ言っとけばいいんでない？」と、城が頭にフィットして取れないカニ玉。
「いや、そっちの羊じゃないからね。」と、奇妙丸がツッコミを入れた衝撃で、カニ玉の頭の城が取れた。
「なんだぁ。君たちを見ている方が７．３倍面白いではないか。」
引き笑いが止まらない孔明であった。

しばらく三人でボケとツッコミをしていると、上の階がうるさくなってきた。
「あ、そろそろ客が来たんじゃん。」と、ジャンプにしおりを挟む奇妙丸。
「もう来なすったか。歯磨きしよう。」と、城を片付けるカニ玉。
孔明は座禅を組んでいる。
「孔明、何してんの。」と着替える奇妙丸。
「執事ですよオーラを集中させておる。」
「それも大事だけど、スーツに着替えたほうが。」と、苦笑する奇妙丸。
「ふおうてふよ。」（訳）そうですよ。と、歯磨きしながら話すカニ玉。
「・・・確かに！」はっとなった孔明はささっと着替える。
「着替えるの早っ！」と、奇妙丸はたまげる。
「前職は忍者だからのう。」と、照れる孔明。
しばらくして、「でも、首になった。」と、はにかみながら孔明は言った。
「ま、そういうこともあるよん。」と、ぴかぴかの歯にリニューアルしたカニ玉。
「やっべ！そろそろ行かないと。」と奇妙丸は慌てる。

今回の観光客は、春満開！料理も男も食べ放題ツアーの一行だ。
「料理も男もって、めっちゃ失礼なんですケド。」と、ぶんむくれる奇妙丸。
「ぼくっちをカニ玉と間違えるなっ！」と、軽く怒るカニ玉くん。
「仕方あるまい。それが世の定め・・・って、そんな定めは嫌だ。」と絶叫する孔明。
「ま、ともかく猫を被っていくぜ。」と自分を励ます奇妙丸。
げんなりした気持ちを立て直すために、三人で円陣を組んでえいえいおー！と叫んだ。

奇妙丸は、必殺技の営業スマイルでお客の注文を取る。
「お嬢様がた、何をお召し上がりになりますか。」
大阪のおばちゃん三人衆は、ペットショップのインコみたいにぺちゃくちゃかしましく話しあってから、声高らかに笑って、
「ほな、あんた。」
と、奇妙丸を指さしてきた。
奇妙丸は熟女好きなので、内心喜びつつ、
「ダメですよ★」と、ウインクして言った。
・・・てか、執事とウエイターって、大して変わんないじゃん。と心の中でツッコム奇妙丸であった。

一方、カニ玉くんは、凶暴なカミツキガメのお守を仰せつかっていた。
「痛っ！噛んだね？おやじにも噛まれたことないのにっ！」
怒りのあまり、カメ相手にお説教を始める。
「あんたねぇ、噛みつけば、何でも解決すると思ってんでしょ。ふっ、甘いね。甘すぎだね。スイートだね。それだからいつまでたってもガメラになれないんだよ。分かる？大物と小物の違い。それは歯並びだよ！」
そう言っている最中に、また噛まれた。
「あっ？そんなに、ぼくっちが美味しいか？ぷんすかぷん。これだから最近の若ガメは。そんなんじゃ恋人ならぬ恋ガメ出来ないぞ。カメのくせにカメつき、じゃなくて噛みつきおってからに。お前の母さんと父さんとばあちゃんとじいちゃんが泣いてるぞ。しかも大泣きだぞ。」
しかし、カメにカニ玉くんの気持ちは届かなかった。
「迷える子執事・・・。」
カニ玉くんは、ぼそりとつぶやいた。

孔明の方は大体うまくやっていた。
「お嬢様。お手を。」
とか、言って、ギャルにネイルアートを施してあげている。
「お美しいですよ。」
「私が？それほど手が？」と、ギャル。
「両方でございますよ。」
「まったくぅ。お世辞がうまいんだから。」
その背後で、カニ玉くんの不思議議話が聞こえる。
不安になった孔明は、ギャルを待たせて、カニ玉くんの様子を見る。
「どうしたのだ。」
「カミツキガメが、小指を噛んでいて取れない。」
孔明の脳内に、昔の歌が流れる。
あなたが噛んだ小指が痛い～♪
「とにかく何とかせねば。」
カメをくすぐってみるが、手足を引っ込められてダメ。
そういえば、カメは甲羅を掻いてあげるとごきげんになると、本で読んだことがある。
孔明は恐る恐る甲羅をぽりぽり掻いてやると、ぱっと口を開けたので、急いでカニ玉くんと、隔離させる。
「ありがとさん。助かったぁ。」涙目のカニ玉くんが言った。
カミツキガメはすっかり孔明になついてしまい、孔明が歩くと後ろをひょこひょことついてくる。
「弱ったなぁ。お嬢様のカメ様なのに・・・。」
孔明は仕方なく、もう一度カメの甲羅を掻いてやると、カメが大喜びしているように見えた。
それを見た、カメの持ち主のお嬢様が、やってきた。
「レオナルド、帰りますわよ。」
お嬢様は、カメを抱いて言った。
「まあ！レオナルドが貴方を気に入ったみたいね。レオナルドのために、また来ますわ。」

そういって、くるりとターンしたお嬢様は、しづしづと出口へ向かう。
「行ってらっしゃいませ、お嬢様。」
孔明は名残惜しそうな顔をしているレオナルドと、目が合ってしまった。

けしからんツアーがきれいさっぱり去った後、奇妙丸、カニ玉、孔明は、夕飯として、ツアー客のお残しを食べる。
「俺たち、よく頑張った。」ほっぺにキスマークだらけの奇妙丸は笑った。
「死ななくって、よかったぁ。」手が包帯だらけのカニ玉くんは、じっと手を見ながら、安心の一言。
「カメに懐かれてしまった。」手がカメ臭い孔明は、キレイキレイで、手をきれいにしてから、お残しを食べる。
他の執事も、わいわい話しながらたらふく食べている。
彼らの細い体のどこに、大量の食物が消えて行くのだろう。
「カメに食べ放題にされちゃったよぅ。」
カニ玉くんは、ずっきんずっきんファンキーに痛む手を労わりながら嘆いた。

夕食後は、三人とも楼閣の屋上で夜風に当たりながら、月見と洒落込む。
うす黄色の満月と、たくさんの星がちらちら輝いて自己主張している。
「あそこの赤い星と、あれとそれを繋いで、ガンダム座。」と、カニ玉くん。
「じゃあ俺は、左上のと右下のこれとそれを繋いで狸座。」と、奇妙丸。
「あっちとそっちとこっちとそれとこれを繋いで、ゾンビ座。」と孔明。

「うそ、ゾンビ座？落ち武者座かと思った。」と、カニ玉くんはからから笑う。
「じゃあ落ち武者ゾンビ座でいいよ。」と、つられて笑う孔明。
「落ち武者ゾンビか・・・。たち悪いな。」と、くすくす笑う奇妙丸。
さてさて、明日はどんな災難が待っているのだろう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1311k/

楼閣の町

2010年12月10日14時15分発行